

浮舟の身に刻まれる言葉

——浮舟卷「つれづれと身を知る雨」の一首をめぐって——

柳 周 希

一、はじめに

宿木巻でその存在が知られ、東屋巻でその姿をあらわした浮舟は、薫と結ばれ宇治に据えられる。しかし、続く浮舟巻において、宇治から正月の挨拶として中の君に届けられた浮舟の手紙をきっかけにして匂宮は浮舟のもとに通うことになる。ここに、薫と匂宮との間で恋に悩んだ末、浮舟巻末で浮舟は死を決意するにいたるのである。このような状況の中、物語は浮舟の意志によつてではなく、周囲の思惑により、進行していくと捉えられている。つまり物語の進行における浮舟の性格をめぐって先行研究では、大君の「形代」として独自の判断力を持たない人物像であるとして、その「無内容」が指摘されている。しかし、次のような歌は浮舟の自己意識について改めて考えさせるものと言えよう。

(浮舟) つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいと
どみかさまさりて

(浮舟⑥一六一)

匂宮との二度目の逢瀬の後、匂宮と薫からそれぞれに文が届く中、浮舟は右の一首を薫に返したのである。ここは薫に對する浮舟の心境が窺える重要な箇所であるが、浮舟の不幸な運命が浮舟自身によつて語られる印象的な部分でもある。

この一首の解釈について、藤井貞和氏は「浮舟は薫の来訪のないことを、浮舟の身分のつたなさに引き合わせて嘆く。ここに身を知る雨が止まらないからと詠み、縁薄い夫婦の契りを嘆く」と述べている。また、針本正行氏は浮舟の入水・出家志向を呼び起こすものとして、この一首をとらえている。そうした解釈をもつてなお説き尽くせない点がこの一首にはあるように思われる。この一首が浮舟巻において持つ意味は

いかなるものであつたか。本稿は、右の一首が詠まれる物語の状況と言葉の分析を通して、浮舟巻における浮舟の自己意識の問題について考察を試みることにしたい。

二、浮舟物語における薫と匂宮の造型

右の歌において浮舟は、薫との関係性の疎遠さを訴え、それを薫に伝えようとしたものと思われる。しかし、この浮舟の一首は、薫への返歌の役割のみならず彼女の運命を彼女自身に重々しく言い聞かせるものとしても読み取れる。まず、右の一首の意味について考察する前に、浮舟物語における薫と匂宮の造型をあらためて明らかにしておきたいと思う。

浮舟物語では、浮舟と薫の間に匂宮の存在が割り込み、薫と浮舟の関係を破局へ導くのである。このような薫と匂宮の対立関係の設定について、甲斐陸朗氏は、匂宮と薫について描写されている横笛巻の叙述に注目し、匂宮が紫の上に育てられることは薫との対立的設定の準備であると捉え、「この時点で少なくとも作者には第三部の構想ができていた」とし、「物語構想上の契機として、つまり、へ女三宮―薫君への系列に对峙するものとしてのへ紫上―匂宮」の設定」であると指摘している。氏の指摘通り、匂宮と中の君との間における薫の存在、薫と浮舟の間における匂宮の存在、というように対立関係をもって物語が進行していく。このような二人の対立

関係により、浮舟の運命が描さぶられるのは確かであろう。ところが、元々、浮舟は彼女なりの判断力をもって薫と匂宮をみていたと思われる節がある。その例として、浮舟は薫か匂宮かという選択の岐路で、次のように考えている。

わが心にも、それこそはあるべきことにはじめより待ちわたれ、とは思ひながら、あながちなる人の御事を思ひ出づるに、恨みたまひしさま、のたましことども面影に つとそひて、いささかまどろめば、夢に見えたまひつつ、
いとうたであるまでおぼゆ。
(浮舟⑥一五七)

薫と匂宮が同時に浮舟を都に迎えようとしたために、浮舟が悩んでいる部分である。ここでわかるように、浮舟は「わが心にも、それこそはあるべきこと」と、薫を迎えとられるべきであると判断しつつ、匂宮のことも忘れられないのである。一方で、浮舟は情熱的な匂宮との恋について「いとうたであるまでおぼゆ」と、冷静に自分の状況を把握している。

薫と匂宮に対する、このような浮舟の思いは徐々に物語の表面に浮かび上がってくる。

この人、はた、いとけはひことに、心深く、なまめかしきさまして、久しかりつるほどの怠りなどのたまふも言

多からず、恋し悲しと下り立たねど、常にあひ見ぬ恋の苦しさを、さまよきほどにうちのためへる、いみじく言ふにはまさりて、いとあはれと人の思ひぬべきさまをしめたまへる人柄なり。艶なる方はさるものにて、行く末長く人の頼みぬべき心ばへなど、こよなくまさりたまへり。思はずなるさまの心ばへなど漏り聞かせたらむときも、なのめならずいみじくこそあべけれ。あやしう、うつし心もなう思し焦らるる人をあはれと思ふも、それはいとあるまじく軽きことぞかし。この人にうしと思はれて、忘れたまひなむ心細さは、いと深うしみにければ、

(浮舟⑥ 一四三)

薫の性格の描写と匂宮との關係について、浮舟の思惑が窺われる部分である。浮舟は「うつし心もなう思し焦らるる人をあはれと思」うことを、「いとあるまじく軽きことぞかし」と思っている。この部分からわかるように、浮舟はかなりすぐれた洞察力を持つ女性であり、人を見る目が鋭敏であったと言えよう。

このように、浮舟は単なる大君の形代に止まらず、自律的な意識をもつて薫と匂宮を判断している。薫のことを思う際、それは初めから中の君や母の中將の君の意思により決定されたことであるとともに、ある程度浮舟自身も納得した上で、

周囲の人々の意見に従っていたと見られる。

三、浮舟の「身を知る雨」——『伊勢物語』第七段の投影

浮舟物語において、薫と匂宮の造型から浮舟の自己意識をめぐって考察してみた。ここで冒頭にあげた浮舟の「つれづれと身を知る雨」歌を思い起こしたい。この浮舟の歌も自己意識の歌として考えたいのであるが、

(浮舟) つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいと
どみかさまさりて

(浮舟⑥ 一六一)

この引歌として従来指摘されるのは次の二首である。

業平朝臣の家に侍りける女のもとに、よみてつかはしける
としゆきの朝臣

ア、つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡れて逢ふよ
しもなし

〔古今集〕卷第十三・恋歌三、六一七にも、

藤原敏行朝臣の、業平朝臣の家なりける女をあひ知りて、文遣はせりける詞に「いままうで来、雨の降りけるをなむ見わづらひ侍る」と言へりけるを聞き

て、かの女に代りてよめりける 在原業平朝臣

イ、かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる

〔古今集〕卷第十四・恋四、七〇五にも

古注では浮舟の歌を『古今集』の恋三と四に分かれてとらわれている。ところが、この歌は『伊勢物語』の第七七段の贈答歌を表現上の対応のみならず物語の主題においてもふまえていると考えられる。ここで、浮舟巻の浮舟の「身を知る雨」歌と『伊勢物語』の話を照らし合わせることによって浮舟巻の主題が鮮明にみえてくると思われる。まず、『伊勢物語』の話をもとめてみたい。

『伊勢物語』第七七段の話は高貴な男に仕えている侍女と内記の藤原敏行との恋の話である。この侍女は若く歌も詠めないで藤原敏行との贈答歌を主人の男が代わりに詠んで女に書かせて贈っていた。雨で藤原敏行が侍女のもとに訪れるのを迷っていると伝えたところ、侍女から例の「身を知る雨」歌が贈られる。この「身を知る雨」について、『新編日本古典全集』の頭注には「男が自分に熱心ではないことがわかる雨の意で、雨で男が来ないことにより、わが身のほどを知って悲しみに流す涙の意がこめられている」と解している。頭注の指摘通り、侍女は、雨のせいで男が来ないことから男の

愛情の薄さを感じ、わが身のほどを嘆く。ところが、侍女の歌を受け取った藤原敏行は、「みのもかさも取りあへで、しとどにぬれてまどひ」（『伊勢物語』第七七段、二〇七頁）¹⁰と、侍女のもとに駆けつけたのである。要するに、侍女の「身を知る雨」歌は、男の愛情を問いたたず働きを持つものであったと言えよう。これに反して浮舟の「身を知る雨」の歌を手にした薫は「うちも置かず見たまふ」（浮舟⑥一六一）と感心するも浮舟のもとをすぐ訪ねることはなかったのである。このことから、浮舟巻のこの部分において『伊勢物語』の話が想起されることにより、余計に浮舟の心境を読み取れない薫と浮舟のずれが目立つと言えよう。

ここで本来の浮舟の「身を知る雨」歌の問題にもどってみたいと思う。この歌について詳しい解釈をしているのは本居宣長である。『源氏物語玉の小櫛』には「身をしるは、此歌にては、我が身をうき身とする意なるを、かの本歌によりて、身をしる雨といひ、さて下句、身をうき物としるにつけて、いよいよ涙も袖におちまざる也」とあるように、この一首において、浮舟は「憂き身」である我が身を思い薫に返歌したと解するのである。本稿でも、宣長説に従って「憂き身」の意味で読み取りたいのであるが、ここで押さえておきたいのは薫と匂宮への返歌を贈る前に、下書きとして書いた手習歌の存在である。

まず、薫から浮舟に贈られた歌を確認しておきたい。

(薫) 水まさるをちの里人いかならむ晴れぬながめに
かきくらすころ
(浮舟⑥一五九)

浮舟の安否を問う歌といえるだろうが、浮舟はこの薫の歌に
対しすぐに返事するのではなく、次の手習歌を無心にかいて
いる。

(浮舟)「今日は、え聞こゆまじ」と恥ぢらひて、手習に、
里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいと
ど住みうき

宮の描きたまへりし絵を、時々見て泣かれけり。

(浮舟⑥一六〇)

浮舟はこの手習歌を書いた後、句宮と一緒に見た絵をみな
がら泣くことから、浮舟巻での浮舟の思いは句宮にやや傾い
ているとみられる。しかし、この部分は、薫と句宮との板挟
みで浮舟の苦悩がいかに深刻なるものであったかを窺える
ところでもある。ここで注目したいのは、浮舟の手習歌の「里
の名をわが身に知れば」の表現である。『新編日本古典全集』
の頭注には、「薫が「をちの里人」と呼びかけたのを受ける」

としている。確かに、「里の名」¹²は宇治の地名に誘い起こされ
「憂し」をかけたもので、この表現から身の憂さを嘆く浮舟
の心境を窺うことができる。ただし、薫の歌に対する返歌で
はなく手習歌であることに注意したい。この手習歌の後、浮
舟は句宮と薫に返歌を贈るのであって、手習歌そのものを薫
に贈ることはなかった。例の「身を知る雨」歌はその手習歌
の延長線であると考えられる。つまり、薫への浮舟の返歌
「身を知る雨」を「憂き身」と読み取るにあたっては、この
手習歌の「里の名」と結びつけて考えるべきである。さらに、
この手習歌が浮舟自身の身の上への確かな洞察と今後の悩み
などを明らかにあらわしていることから、薫への返歌も答歌
であると同時に彼女自身の自己意識をあらわした歌として読
み取れると考えられる。

浮舟の手習歌は、すでにその重要性について指摘されてき
た。¹³ 浮舟巻において、手習歌は二首あるが、次の歌も彼女の
運命を予知するようなものといえよう。

(浮舟) 降りみだれみぎはにこほる雪よりも中空にて
ぞわれは消ぬべき

と書き消ちたり。この「中空」をとがめたまふ。げに、
憎くも書きてけるかなと、恥づかしくてひき破りつ。

(浮舟⑥一五四)

この場面からは、匂宮との関係で物思いにふける浮舟の心境がうかがわれる。さらに「中空」に消えていく自分の運命を予測していることも物語における手習歌の重要性を明らかにしている。それに浮舟自身が不吉を感じ、かき消したわけである。自分も感知できなかった心境が手習歌としてあらわれたとも言えよう。

例の浮舟の歌も単に薫への返歌としての機能に止まらないということ的前提に問題を提起したが、この歌における浮舟の彼女自身への凝視もまた見逃し難い。

四、「つれづれ」の感覚と浮舟

浮舟の「つれづれと身を知る雨」歌において、「つれづれ」という表現に着目しつつ、匂宮との密通に繋がる浮舟の心情のあらわれとして考察を試みてみたい。「つれづれ」という言葉は浮舟の登場後、浮舟とは切り離せないものとなる。そして、浮舟のこのような感情は、薫との疎遠を説明するものであるとともに、匂宮との密通の感覚とも結びつけて考えられると言えよう。

周知のように、二条院において、浮舟は薫より匂宮の方に先に接していた。次の部分は、二条院に比べ殺風景な三条の隠れ家で、浮舟が一人で様々な物思いに沈んでいる一節であ

る。

旅の宿はつれづれにて、庭の草もいぶせき心地するに、賤しき東国声したる者どもばかりのみ出で入り、慰めに見るべき前栽の花もなし。うちあばれて、はればれしからで明かし暮らすに、宮の上の御ありさま思ひ出づるに、若い心地に恋しかりけり。あやにくだちたまへりし人の御けはひも、さすがに思ひ出でられて、何ごとにかありけむ、いと多くあはれげにのたまひしかな、なごりをかしかりし御移り香も、まだ残りたる心地して、恐ろしかりしも思ひ出でらる。

(東屋⑥八三)

この場面は浮舟物語において、匂宮を考える際、欠かすことができない部分である。なぜなら、この箇所では、これまでの浮舟物語とは、やや様相を異にして、浮舟の内面がある程度具体的に語られているからである。

振り返ってみると、宿木巻からこの部分まで、浮舟本人の心境が窺われる箇所は殆どなく、浮舟の周囲の人々の思いや状況が彼女を取り囲む形で語られていた。はじめて浮舟の内面の叙述が見える部分にしても、彼女自身の内面叙述とは言えない性質のものであった。この点については、既に平林優子氏の指摘があるが、例えば、母の計らいで、中の君のいる

二条院の西の対に移ることが決まった時や、その後、浮舟を中の君に託して中将の君が常陸邸に帰る時などの叙述がそれである。「(中将の君は)いとうれしと思ほして、人知れず出で立つ。御方も、かの御あたりをば睦びきこえまほしと思ふ心なれば、なかなかかかることどもの出で来たるをうれしと思ふ」(東屋⑥四〇)「この御方も、いと心細くならはぬ心地に立ち離れんと思へど」(東屋⑥五七)のように、いずれも「御方も」「この御方も」という形で、浮舟の内心は母の中将の思いに密着した形で語られていた。

しかし、この三条の隠れ家での浮舟の心情叙述は、明らかに以前のそれとは位相を異にしている。東屋巻から本格的に物語に登場している浮舟は、東国から中の君の二条院へと移され、中の君の蔭に隠れて日々を送る。やっと一人になった浮舟は、自分の身の上について思いにふける時間ができた。二条院での匂宮との出来事を「恐ろしかりしも思ひでらる」と、思い返す。この匂宮との出来事をめぐって、浮舟は母や乳母などの思いとは別の、自分自身の固有の思いを持ちはじめられているのである。薫と契る前、浮舟にとって匂宮との出来事はあまりにも強烈な印象を残している。このように、三条の隠れ家で、浮舟は匂宮との出来事を気かけながら、薫と結ばれることにより、薫に頼るようになる。

ここで、注目したいのは、「旅の宿りはつれづれにて」の

三条の隠れ家の場面描写と「恐ろしかりしも思ひでらる」という浮舟の心情が調和している点である。三条の隠れ家に至る前、浮舟は「つれづれ」を感じたことはなかった。母と中の君のそばから離れることにより浮舟は「つれづれ」の思いを抱きはじめ、自分の身の上を思うようになったと見られる。ここで偶然にも彼女の心中にあつたのは、匂宮との出来事である。このことから、浮舟巻で、浮舟の「つれづれ」の深層に匂宮の思い出が刻み込まれていると言える。そして、浮舟はその「つれづれ」の感情に惑わされつつ匂宮との密通に向かつていくと言えよう。

このような観点から浮舟をめぐっての、「つれづれ」に関する用例を辿りながら、特に、彼女の密通と結びつけて考えてみたい。

(匂宮)「今はのたまへかし。誰がぞ」とのたまへば、(中の君)「昔、かの山里にありける人のむすめの、さるやうありて、このごろかしこにあるとなむ聞きはべりし」と聞こえたまへば、おしなべて仕うまつるとは見えぬ文書きを心得たまふに、かのわづらはしきことあるに思しあはせつ。卯槌をかしう、つれづれなりける人のしわざと見えたり。またぶりに、山橋作りて貫きそへたる枝に、

(浮舟) まだ古りぬものにはあれど君がためふかき心に
まつと知らなん

と、ことなることなきを、かの思ひわたる人のにやと思
し寄りぬるに、御目とまりて、(句宮)「返り事したまへ。
情なし。隠いたまふべき文にもあらざめるを。など御氣
色のあしき。まかりなんよ」とて立ちたまひぬ。

(浮舟⑥ 一一二)

正月になり、浮舟から異母姉の中の君のもとへ手紙が届く。
それが、居合わせた句宮の目にとまる。ここで注目すべき点
は、浮舟の手紙をみて句宮はまず、「つれづれなりける人の
しわざ」と思うのである。『湖月抄』⁷では、「つれづれなりけ
る人の」について「隙のある人のしたるものと也」と述べ、
また「かのわづらはしきこと」は「かの見初め給ひし人とお
ほしあはず也」と、語っている。句宮はそこで「思しあはせ
つ」と、以前、偶然に見かけた女君であろうと推測するの
である。結局、この手紙がきっかけで物語では急速に句宮と浮
舟の関係が展開していくのである。「つれづれなりける人」
という表現は密通へと導かれる暗示のように使われているの
ではないかと思われる。この中の君のもとに届いた浮舟の手
紙を読んだ後、句宮が宇治を訪れ浮舟のもとに忍び通うよう
になることを考えると、やはり何かの暗示が潜んでいると言

えよう。そして、浮舟の暮らしについて物語は彼女の感情と
は別に、周囲の人々の言葉によって、「つれづれ」と表現し
ていくのである。

母君、たつやと、いとあはれなる文を書きておこせた
まふ。おろかならず心苦しう思ひあつかひたまふめるに、
かひなうもてあつかはれたてまつることとうち泣かれ
て、「いかにつれづれに見ならばぬ心地したまふらん。
しばし忍び過ぐしたまへ」とある返り事に、(浮舟)「つ
れづれは何か。心やすくてなむ。」(東屋⑥ 八三〇八四)

引用文は、中の君のところから隠れ家へ移した浮舟のもと
に、母の中將の君から連絡が届く部分である。ここで、母の
中將の君は浮舟に三条の隠れ家での暮らしに対して、「いかに
つれづれに見ならばぬこちしたまふらむ。」と、所在な
さを語っている。これに対し、浮舟は「心やすくてなむ」と、
中將の君を慰めるのである。

この浮舟と母の贈答場面について、「つれづれ」の表現に
注意した鈴木裕子氏は、「母の知らないところで、既に「恋」
の感覚に目覚めつつある浮舟は、その抽象的な「恋」の回想
でつれづれの心を埋めている、そうして過ごす「つれづれ」
など少しも苦ではない、と言っているのである。」⁹と示唆に富

んだ指摘をする。しかし、ここで押さえておきたいのは、まだ、浮舟は匂宮との間で恋の感情を育んでいるとは言い切れないことである。氏の指摘の中で、「抽象的な「恋」の回想でつれづれの心を埋めている」とあることは、問い直す余地があるのではないか。あくまで、この段階では匂宮に対する浮舟の思いは恐ろしい体験の記憶に止まっている。浮舟にとつては彼女の置かれた状況や心情の「つれづれ」に匂宮の記憶が刻み込まれていく過程であるように思われる。そこから彼女の密通の感覚が深まってくと思われる。そして、薫により宇治に移された後も、なんらかの形でこの「つれづれ」という表現が浮舟の心境を表す言葉として語られている。

次は、匂宮との密通の後、薫と匂宮との間で、悩んだ末、死を決心した浮舟が匂宮からの手紙を処分する場面である。

むつかしき反故など破りて、おどろおどろしく一たび
にもしたためず、灯台の火に焼き、水に投げ入れさせな
どやうやう失ふ。心知らぬ御達は、ものへ渡りたまふべ
ければ、つれづれなる月日を経て、はかなくし集めたま
へる手習などを破りたまふなめりと思ふ。

(浮舟⑥ 一八五)

浮舟が死を決心した後の場面であるが、周囲の人々は、こ

れからの京の生活のため、浮舟が手紙を処分していると思っ
ている。「つれづれなる月日を経て」とは、宇治での浮舟の
生活がいかに所在ないものであったかが周囲の人々の視線で
語られたものである。その原因が、薫が浮舟のもとへなかな
か訪れないことにあつたのは確かであろう。

以上のように、浮舟にとつて「つれづれ」の言葉は単なる
暇を表す表現にとどまらない。浮舟巻で、浮舟が母の傍から
離れて人生を一人歩み始める時点から感じる「つれづれ」と
いう寂寥感と匂宮への思いが同時に語り始められることは注
目すべき点である。居所を失つた浮舟が彷徨う空間だけでは
なく、彼女の過ごす苦しい時間からも他者の意志（特に、匂
宮との密通につながる）に左右されるしかない彼女の無力さ
を読み取ることができると思う。それが、匂宮との関係が急
速に進んだ一つのきっかけになつたとも思われる。

浮舟にとつて、宇治の時空、そのものがへさすらいである。
もう一つ考えたいのは、薫と離れた宇治で、浮舟の「つ
れづれ」という感情が深まってく、ということである。そ
して、薫との間が疎遠である中、かわりにその座をしめるの
は、匂宮である。つまり、「つれづれ」という表現は浮舟の
密通の感覚を説明する一つの鍵となる言葉であると言えよ
う。

五、おわりに

以上のように、浮舟巻における浮舟の「自己意識の問題を、彼女の「身を知る雨」歌を中心に考察してみた。返歌として薫に贈られた浮舟の歌は、薫との感情のずれと彼女自身の自己意識を感じさせるものであると思われる。浮舟巻の冒頭で匂宮との密通に身を委ねた浮舟であったが、それに走るしかなかった彼女自身の心境が、巧みに歌を通して語られている。特に、浮舟の手習歌には、彼女本人さえも意識しきれない感情を表面化させる言葉が書かれている。このような浮舟の一連の言葉は、巧みな連想によって練り上げられ、浮舟の運命さえ揺さぶるものであるとも思われるのである。

浮舟巻を浮舟物語の中でいかに位置づければよいか。浮舟巻を浮舟の自己意識の場としてみた場合、この「身を知る雨」歌の部分は、重要な箇所である。なぜならば、この歌を詠んでから浮舟は疎遠な薫との関係を再認識し自分の身の上を「憂き身」として把握していくからである。さらに、この歌が『古今集』・『伊勢物語』第百七段の「身を知る雨」の言葉のみならず、その主題までを練りこんでいるところに注意すべきであろう。『伊勢物語』の話と浮舟の諸問題と合わせ論ずることによって、さらに浮舟巻の主題が明らかになるに違いないが、今のところ確かなのは、浮舟巻で、薫、匂宮

との関係に混迷する中、自分の身の上を深刻に認識していく自己意識の片鱗として浮舟の「身を知る雨」歌があったことであるといえよう。

注

- 1 鈴木日出男「源氏物語虚構論」(東京大学出版会、二〇〇三年)
- 2 「源氏物語」の本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)によりその巻名と巻数、頁数を記す。
- 3 藤井貞和「歌人浮舟の成長——物語における」(『源氏物語論』(岩波書店、二〇〇〇年)一六頁)
- 4 針本正行「「身を知る雨」表現史論——『古今集』・『伊勢物語』・『和泉式部日記』・『源氏物語』を中心に——」(『室伏信助(編)『伊勢物語の表現史』、笠間書院、二〇〇四年)。本稿は、針本氏の論に導かれつつ、それと同時に、浮舟の「身を知る雨」歌が彼女の入水・出家志向を読み起こすものとしてあったと捉える針本氏の論とはやや異なる視点で浮舟の「身を知る雨」歌を分析したものである。
- 5 甲斐睦朗「源氏物語の人物把握の二方法——匂宮の人物像を中心に——」(『中古文学』七号、一九七一年三月)
- 6 伊井春樹「浮舟の異性観」(『解釈と鑑賞 国文学』第六九巻十二号、二〇〇四年十二月)に指摘がある。
- 7 『古今集』の本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)によ

り巻数と歌の番号を記す。

- 8 『河海抄』にはアの歌を、『岷江入楚』『紫明抄』『孟律抄』にはイの歌を、『湖月抄』にはア、イ両方を引歌としてあげている。

- 9 小町谷照彦「手習の君浮舟」（『王朝文学の歌ことば表現』若草書房、一九九七年）

- 10 『伊勢物語』の本文は、『新編日本古典全集』（小学館）により、段数と頁を記す。

- 11 『本居宣長全集』第四卷（筑摩書房、一九六九年）五〇六頁
『細流抄』に「里の名とは、宇治をいへり。喜撰が歌より出たり。いとどいへる字妙也。里の名といひて、うきはみえたるを、

- 12 又かさねてうきといへる感ある事也」としている。

- 13 池田和臣「源氏物語 表現構造と水脈」（武威野書院、二〇〇一年）
関根賢司「宇治十帖の企て」（おうふう、二〇〇五年）、高田裕彦「源氏物語の文学史」（東京大学出版会、二〇〇三年）など。

- 14 平林優子「浮舟の入水について」（『論集平安文学第四号』源氏物語試論集、勉誠社、一九九七年）

- 15 「つれづれ」の言葉の意味は、「為す事もなくて物寂しきさま。すべきわざもなく、ひまなるさま。閑散無聊」の意味である

- 16 （北山谿太「源氏物語辞典」、平凡社、一九七五年）。

- 橋本真理子「源氏物語における「つれづれ」についての試論」（『平安朝文学研究』一九六九年二月）は、宇治十帖における「つれづれ」の用例の中、特に、浮舟に関する用例の多さから、

「無性格と云われる浮舟の人間の形象化の方法にも、作者の意図

にも接近し得るのではなからうか」とその重要性に着目している。氏の見解は手習巻に重心を置き「現世離脱から出家へ向かう、内部より生じた耐え難い余剰のエネルギー」と説く。

最近、高橋汐子氏「つれづれ」の女君——浮舟物語における「つれづれ」考——（『物語研究』第四号、物語研究会、二〇〇四年三月）では、匂宮によって、浮舟の時間が変化するとして、

浮舟の「つれづれ」の思いが匂宮に左右されていることを指摘している。これに対し、本節では浮舟巻で浮舟の置かれた状況と心境の中における浮舟の「つれづれ」を匂宮との密通への下地として読み解きたい。

17 有川武彦（校訂）『増注 源氏物語湖月抄』（講談社学術文庫三一四—三一五、講談社、一九八二年、七六四—七六五頁）

18 井野葉子「浮舟の山橋」（『論叢源氏物語4本文と表現』、新潮社、二〇〇二年）では「山橋」の語から浮舟の「忍ぶ恋」を読み解いている。

19 鈴木裕子「浮舟の和歌について——初期の贈答歌二首の再検討——」（『中古文学』第五五卷五七号（中古文学会、一九九六年五月）四二頁）

20 高橋亨「宇治物語時空論」（『源氏物語の対立法』、東京大学出版社、一九八二年）